

すべての日本人が、日本人であることに誇りをもつことができる、その日まで

永島 加南子

1 はじめに

アメリカファーストを掲げるトランプ大統領の誕生、イギリスのEU離脱決定、ポピュリズムの台頭。世界は大きな転換期を迎えている。資本主義とグローバリズムが貧富の格差と社会の分断を拡大した結果、国家の前提である社会契約（の存在）をもはや信じられないとの声さえ聞こえる。今、「資本主義」が、さらには「国家観」そのものが問われ始めている。

他方、私たちの足元では、テクノロジーが進化。アトム化された個人を統合する仕組みや組織は力を失い、人間を一つのアルゴリズムと認識し、大量のデータを独占するプラットフォームが国家に取って代わる懸念も指摘されている。

2018年。平成最後のカウントダウン。戦後の世界で当たり前だと考えられてきたことの根底が何か大きな力によってひっくり返されそうな、そんな不穏さを感じる。

すべてが分断され、「統合」が難しい今だからこそ、日本は、そして日本外交は、真の国益を追求しなければならない。同時に、ただ国益追求に終始するのではなく、真の国際協調へ世界を導く、誇りに満ちた国であり続けたい。

2 現在の国際情勢の認識

はじめに、世界の盟主、アメリカについて分析したい。私は、トランプ大統領は歴史の偶然でも、アメリカ国民の愚かな選択でもないと考えている。グローバリズムによって生じた格差の是正や雇用増大などを切実に求める「忘れられた人々」に目を向け、アメリカファーストを掲げるトランプ大統領の登場は歴史の必然である。国際的な枠組みを否定し、二国間交渉のディールの中で、アメリカにとって有利な条件を引き出すトランプ大統領の外交スタイルは、米国内でコアな支持層を獲得している。

貿易不均衡の問題に加え、サイバー攻撃や不正な情報の入手といった今日の問題に果敢に取り組むトランプ政権は、中国、ロシアと近接する日本にとって追い風であり、貿易不均衡問題の矛先が日本に向けられることを慎重に回避しながら、アメリカと協調することが肝要である。

次に、驚異的な経済発展を遂げ、GDP世界2位の超大国となった中国である。私が今年の夏に中国の大学に短期留学した際に、大国中国の光と影を垣間見ることができた。目覚ましい技術革新を実感する一方で、無数の監視カメラと社会信用スコアによる効率的社会を誇らしげに語る担当者の姿が、オーウェルの「1984年」を彷彿とさせ、背筋が寒くなった。テクノロジーはあくまでも手段であり、それは倫理観という手綱によって制御されるべきものである。北京の町で、物乞いのために私たちに手を差し出す人々を目の当たりにして、この国ではそのような倫理観もそれに必要な開かれた議論も存在していないだろうと思った。また、当地で知り合った中国の学生の「医師は不人気な職

業だ。偉いひとの子供を救えないと殺されてしまう」という言葉に驚いた。「台湾は中国のものだと教えられるが、日本人もそう思っているのか?」。そう私に尋ねた彼女の不安そうなまなざしが、すべてを物語っていたように思える。中国は紛れもない経済大国だ。しかし、アンバランスな異形の巨人という印象をぬぐえない。

言うまでもなく、こうした米中の在り方にもっとも影響を受けるのは、アメリカの最重要の同盟国であり、中国と近接する日本である。日本はこの二国間のこれからのパワーバランスを予測し、来るべき新たなステージに備えなければならない。

3 これからの世界

これからの世界について、様々な著作・見解があるが、私がもっとも的確と考えるのが、イアン・ブレマーの見解である。ブレマーは、「Gゼロ」後の世界」の中で、①圧倒的な力を持つ米中が協力体制を築く「G2」、②米中が敵対関係を続ける「冷戦2.0」、③米中に加え有力な複数の大国が築きあげる「協調」、④群雄が割拠する「地域分裂世界」の4つのシナリオを提示。④の実現性が一番高いと指摘しつつ、あわせて、「国家」自体が力を失い無秩序が広がる「G マイナス」というワイルドカードを示している。

技術の無秩序な進化と人々のアトム化、グローバリズムへの失望が、すべての「統合」を困難にする現状は、「G マイナス」の可能性すら予見させるものであるが、我が国の外交は、こうしたマクロの視点と、現実的な戦略・戦術の両方を併せ持つ必要がある。

4 日本外交の最適な選択肢

足元の情勢は楽観できる要素が少ないが、領土と資源が限定的な日本にとって、グローバリズムによって支えられた自由で開かれた貿易は生命線であり、これからもそうであり続けるだろう。グローバリズムに輝きを取り戻させ、自由貿易を推進することは日本の国益であり、世界的協調を推進することは日本の使命であると私は考えている。

他方、グローバリズムを志向するドイツ、フランスの首相が国内で叩かれるなど、各国の外交政策の選択肢が非常に限定的となる中、日本は偏狭なナショナリズム・ポピュリズムの罠にはまることもなく、比較的幅の広い外交政策のカードを確保している稀有な国といってよい。これは、島国のため移民流入圧力が小さい、間接民主制で政権交代の蓋然性が低い、現政権が企業や経済を重視する現実的政策を採りながらも、首相の家父長的キャラクターから右派に人気が高い、といった複合的な理由によるものと考えられるが、この相対的に恵まれた環境を最大限に活用することが大切であろう。

こうしたことから、私は、①グローバリズムや国際協調に対する確信と希望を持ち続ける「大局観・信念に基づく外交」、②足元で反グローバリズムに振り子が振れた現実を見据えた「時間軸を意識した外交」、③現政権の特異性・優位性を活かした「戦術的な外交」を提言したい。

具体的には、相互不信が相互のマイナスに作用する「囚人のジレンマ」の状況が、「チキンゲーム」にまで陥ることの弊害（「G マイナス」世界出現の懸念）を世界で説き、TPP

を含めた自由貿易を辛抱強く働きかける一方で、当面はアメリカ政府の方針である二国間交渉において、日本の国益を最大限引き出すことが肝要である。

また、緊張関係が続く朝鮮半島では、自国の経済指標、内閣支持率が低下するたびに、対日強硬論を展開する韓国の文政権、いまだに拉致被害者問題に誠意ある態度を示さない北朝鮮に対し、日本は今まで通り冷静に、国際法をもって日本の正当性を主張し、未来志向の外交を働きかけ続けるべきである。欧州において、東欧が成長市場となっている現実を踏まえれば、朝鮮半島の統一は歴史の必然と冷静に分析したうえで、統一後の北朝鮮市場へのアクセスを確保することも大切な視点である。

5 最後に

言うまでもなく、外交と内政は密接不可分である。日本は各国が内向きになるこの機会に、自分の国は自分で守るという原則に立ち帰るべきである。日本は戦後アメリカに自国の安全保障の大部分を保証され、それが次第に当たり前となり、国民は地政学的リスクを実感することもなかった。しかしアメリカ国内では、日本の防衛のためのコストについて懐疑的な見方が増えてこよう。これに対し、アメリカがいつまでも世界の警察官であるべきだと主張することは建設的でない。社会契約によって日本国民の安全と幸福を守る責務を負っているのは、日本政府にはかならない。軍事費を増やせば、それだけ戦争のリスクが高まるという議論にも説得力がない。戦争は戦力があるところではなく、戦力の不均衡が生じたところに起こるからである。現実的平和主義に基づいて防衛費、軍事力を増やすことは、アメリカをはじめ各国と対等に渡り合うための前提条件といえるだろう。

「一人で自分の身を守るには弱すぎる人間が集まって作ったものが国家であり、人間の統合体が国家である以上、国益は私益の統合体である」。これは12歳の夏、「海賊と呼ばれた男」を読んで、祖国を愛することを初めて知って涙し、祖国を守る手段として、国際政治、とりわけ地政学に興味を持ち続けてきた私が、16歳の今導き出した、私の中の政治の一番の原則でありひとつの答えである。

高校の友人の屈託のない笑顔、電車の中でお母さんの手をぎゅっと握りしめて、ちょこんと腰かけているりんごのような頬をした女の子、あぜ道を、互いを杖のようにして支えあいながら、一歩ずつゆっくりと歩く老夫婦。そのすべてが愛おしい。私は日本が大好きだ。この国に生まれてよかった、この国でたくさんの人々と出会って育つことができ本当に良かったと心から思う。私にとって日本人であることは誇りである。しかし今の日本では戦争という負の遺産から、愛国心＝戦争というようなイメージがあることが、私は悲しい。平成のカウントダウンがはじまった今、その思い込みはそろそろ卒業しようではないか。自分を愛することなく他人を愛することなどできない。自国を愛することなく、ほかの国を、ましてや人類全体を愛することなどできるのであろうか。祖国を愛し、祖国のために尽くしてきた人々があってこそ、今の日本がある。国家という概念に懐疑的な意見が世界中で聞かれる今だからこそ特に祖国愛が重要なのだと思う。一つ一つの賢い選択の積み重ねの先に、国際協調に貢献する威厳ある日本があると信じ、日本人としての誇りと、国境に隔てられることのない人類愛を胸に、日本人一人ひとり、特

に私と同世代の若者が最善を尽くすことが必要だ。すべての日本人が、日本人であることに誇りを持つことができる、その日まで。

以上